

# ジャパネットたかたが COBOLを選択した理由



株式会社 ジャパネットたかた  
専務執行役員 星井 龍也

2010年4月16日

# 目次

---

1. 会社概要
2. ビジネスニーズ=スピード経営
3. 今までのシステム開発体制
4. 自社開発体制構築の必要性和戦略
5. 自社開発体制構築の手順
6. ダウンサイジング成功への重要課題
7. COBOLを選択した理由
8. COBOLの浸透と継承

# 1.会社概要

- 社名 株式会社 ジャパネットたかた
- 本社 長崎県佐世保市
- 売上高 1491億(2009年)/1370億(2008年)/1161億(2007年)
- 従業員 466人(2010年1月時点)
- 設立 1986年1月
- 事業内容 家電、雑貨、健康食品などを扱う通信販売
- 事業方針
  1. メディアミックス戦略  
テレビ、ラジオ、カタログ、チラシ、インターネットなどのメディアにより  
全国展開
  2. 自前主義  
商品仕入れから、メディア制作、コールセンター・物流センター運営、  
アフターフォローまで、自社で一貫した管理を行なう体制

# 2. ビジネスニーズ=スピード経営

～スピード経営を支えるスピード開発～

1. 顧客価値を高めるサービスを提供し続ける
  - ・ 業務が拡大し会社全体での業務改善が最重要
2. 高いサービス品質を目指し、全部門が自部門の改善改革に取り組む
  - ・ 部門の品質や効率を表す指標の設定
  - ・ 指標の評価
3. 改善改革のビジネススピードに拍車がかかる
  - ・ 同時に複数のシステム開発が常態となる
4. 情報システムがクリティカルな役割
  - ・ 開発期間がボトルネック
  - ・ 安全運行の保証が課題

# 3. 今までのシステム開発体制

1. システム構築をベンダーに依頼
  - スタート時点では汎用機上にメディアミックス通販システムの基礎を構築
  - COBOLと4GL(第4世代言語)及びVBの組み合わせで、汎用機と連携
  - 4GLでCOBOLプログラムを生成
  - 顧客との接点である顧客対応画面はVB開発
  - VBによる顧客画面はホストのCOBOLプログラム経由で基幹データベースと連携
2. 情報系はWindows Server上で開発
  - ホストデータベースとSQL Serverの同期連携ツールを導入
  - GUIをWebブラウザ上で表現しASP言語による開発

**ボトルネック=開発スピード**

仕様をベンダーと決め、見積り、発注するサイクルは現場の改善**スピード**に追いつかない

# 4. 自社開発体制構築の必要性と戦略

## □ 他部門では一斉に改善改革が行われている

- ・ 開発要求の波は、小刻みに押し寄せる
- ・ 現場の改善スピードに弾みがつく
- ・ 更に要求が重なり、大きな波となる



## □ 開発の波を受け止め、開発に責任をもつ体制が最重要



## □ 汎用機のダウンサイジングを通じて自社開発体制を実現する戦略を開始

- ・ 船でいうセール(=自社開発体制)とマスト(=自社運用体制)で基盤を構築
- ・ スピードと責任を持って前進させる
- ・ 自分たちで方向を探り、不具合を修復して先を見る

# 5. 自社開発体制構築の手順

～ダウンサイジングを実現する要員の育成～

- 中途採用で経験者を募集、不足分はベンダーから派遣し、開発要員を確保する
  - ・ 社員とベンダーの混合チームで開発管理を仕組み化し、業務習得及びプロジェクトの効率と品質の向上を目指す
  - ・ 補充要員は2年間保守業務を担当



- 自社内でダウンサイジングを完結させることが自社運営の鍵
  - ・ 自社内でデータベース、プログラムの書き換えを行なう
  - ・ 混合チームが中心となり汎用機ダウンサイジングを実現する
  - ・ 業務知識がなく、開発スキル格差があるメンバーで実現する

# 6.ダウンサイジング成功への重要課題

～汎用機システムからオープンサーバーシステムへの切り換え～

1. パフォーマンス問題の解決
  - ・ データベースハードウェアとデータベースソフトウェアの効率性、安全性、拡張性にこだわり次期システム構成を選択する
  - ・ 1000台の同時受注トランザクション処理を可能にするQueue操作と実地試験で性能評価
2. 基幹のビジネスロジックの正確な移行
  - ・ 今後、長期に渡って耐え得る、開発環境、実行環境を整備する
3. シンプルな技術を選択
  - ・ 自社で理解でき、自社で復旧できるものに絞る
4. ダウンサイジング期間の制約
  - ・ 現行の汎用機の処理能力が限界にあり、一年半がリミットであった

# 7. COBOLを選択した理由

- 目的に応じ、特性に合致した開発言語の選択
  - ・リアルタイム画面に適合する言語：C#言語
  - ・ECサイト大量ランザクション処理に適合する言語：JAVA言語
  - ・ビジネスロジックに適合する言語：COBOL言語、VB言語
  - ・ジョブ制御に適合する言語：JP1



- 基幹システムを支える言語としてCOBOL2002を選択
  - ・バッチ処理をCOBOLからC#、VBに書き直しても生産性は上がらない
  - ・データベース操作をSQLにさえすれば、言語はシンプルな構文を備えるCOBOLが解り易い
  - ・ビジネスロジックを生かす

## 8. COBOLの浸透と継承

- 採用言語として周知する
    - ・ ジャパネットが採用する基幹系言語はCOBOLであることをメンバーに宣言する
    - ・ その他の目的言語としてVB、C#、ASP、JAVAを選択する
- ▼
- 常にシステムを整理整頓しソフトウェア資産とする
    - ・ コーディングやネーミングの規約を守り続ける
    - ・ 基本設計終了時、システムテストの開始時及び受け入れテスト終了時に重点的なレビューを実施し、資産としてのプログラム品質を保つ
    - ・ ソフトウェア資産として、整理された状態を維持することを企業文化として継承する